令和元年十二月投句

気遣ひの我慢の果ての大くさめ　冬うらら河童寝そべる川下り

赤子抱く母親父親マスクして　節子　やわらかな冬日欄間の透かし彫　由紀子

リビングに機影よぎるや日脚伸ぶ　掘割に戸毎の汲水場石蕗の花

身じろぎもせず冬の綿雲五枚

大綿のむこうの山の静かなる　勝利　お休み　真理子

大綿をはたける丈になりたしと

大綿や猫の昼寝のまだ続き

冬芽立つ石垣のみの夢のあと　光子

吾を頼りきつたる夫や冬帽子